

大阪府・私立興國高校

## 組織的な学校改革

全教師によるボトムアップの改革で、学校存続の危機を乗り越え、一人ひとりの希望進路を実現



### 学校概要

- ◎設立 1926 (大正15)年
- ◎形態 全日制／普通科・ITビジネス科／男子校
- ◎生徒数 1学年約750人
- ◎2020年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、京都大、大阪大、神戸大、広島大、札幌医科大、大阪市立大、大阪府立大などに91人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西医科大、関西大、近畿大、関西学院大、兵庫医科大などに延べ約800人が合格。

### 変革の背景

志願者の急減を受けて、  
全校での大プロジェクトが始動

毎年2500人以上いた、大阪府・私立興國高校への志願者数が2000年度高校入試で半減し、同校に激震が走った。少子化がその一因ではあったが、理由はほかにもあった。普通科と商業科を擁していた当時の同校は、特色を打ち出せておらず、大学進学実績も低迷。生徒指導に苦慮する場面も多く、地域から問題を指摘されることもあった。

「このままでは、学校の存続にかかわる」と、強い危機感を抱いた草島葉子理事長(当時、

事務局長)は、先代理事長とともに、全校に呼びかけて学校改革に乗り出した。まず、全教師が学校案内を手にもつ訪問し、同校に対する評価を肌で感じ、危機感を共有した。そして、「学園改革プログラム推進組織」として、「学力不振・習熟度別学習検討」「国際化検討」などのテーマごとに10のチーム(図1)を立ち上げ、全教師がいずれかのチームに所属するようにし、それぞれのテーマに関する現状と今後の対応を議論した。その結果、実に50に及ぶ取り組みが実行された。

「各取り組みは、すべて教師が企画しました。その実行においては責任を伴う半面、自分が学校にとって重要な役割を果たす存在であることを認識できるため、やりがいにつな

### 変革の一手

教師の生徒への思いを形に、  
現場主導でコース改編に取り組む

改革の端緒となったのは、01年度に行われた商業科の「ITビジネス科」への改編だ。

がります。自ら考え、行動する創造的な教師集団に生まれ変わったことが、改革を進める大きな力になりました(草島理事長)。

自走する教師集団によるボトムアップの改革が学校を活性化させ、大学進学者数も増加。一時1000人を切った全校生徒数を2300人にまで回復させた。その軌跡を見ていく。

図1 10のチームと取り組み内容(抜粋)

チーム名	取り組み内容
アドバンス (特進) コース検討	「学力を伸ばし、結果を出す」ことを目標に、それまでになかったカリキュラム編成と、それに伴う教師の準備について検討。3年間の学習スケジュールを具体的に作成し、生徒に提示する。
学力不振・ 習熟度別学習 検討	学力不振者に対する具体策として、学習スタイルの転換、教材の選び方などについて検討。工夫された特色ある指導を考える。
ITビジネス科 検討	商業教育の未来形を常に考え、より実践色を濃くした教育活動を検討。特に、学校内でも先駆者的な取り組みが望まれる。
本校独自 設定科目 検討	生徒が「分かる授業」「参加できる授業」づくりを目的に、教科・科目の捉え方を改め、教科書重視から、本校らしい教科教育を構築する。
生徒・保護者・ 家庭指導 かわり検討	生徒との接し方、保護者との連携について、全教師で統一したスタイルを検討する。保護者への新聞作成は急務とする。
国際化検討	本校で取り組みが遅れていた国際化に対応するための教育を導入する。語学研修やホームステイ等の実施も検討。
クラブ活性化	本校の強みである部活動をより活性化させるための仕組みを構築する。重点クラブの強化、施設の有効利用についても要検討。
クオリティー コントロール 推進	生徒や保護者が「どう捉えているのか」「何を望んでいるのか」を調査し、本校が真に求められている姿を的確に把握する。
担任体制 検討	3年間持ち上がり担任体制を検討。各学年の指導方針を明確化し、生徒が個性豊かな教師とより多く触れ合う機会を得られるようにする。
教職員 活性化 取り組み	学校として統一した業務スタイルの構築を検討。PTAや同窓会との連携、教職員のメンタルヘルスケアなどに取り組む。

※学校資料を基に編集部で作成。

簿記などの資格取得だけでは他校との差別化は図れないと判断し、ICT教育にも力を入れる学科にした。資格取得についても、取得後を見据えた指導に重点を置いた。例えば、3年次の探究学習では、1年次に学んだ簿記の知識を応用して企業分析を行い、ICTを活用して発表するカリキュラムを導入した。さらに、19年度には、従来のITアドバンスコースに加え、大学とも連携しながらプログラミングを学ぶゲーム&デジタルワークスコースを立ち上げ、社会状況に合わせて学びを進化させた。

同科の卒業生の進路は、以前は専門学校進学や就職が大半だったが、現在は難関国公立大学に進学する者や公認会計士を目指す者もいる。資格取得後を見据えた指導で生徒の学習意欲を高めるとともに、後述のアセスメントの活用により、生徒の可能性を引き出せていることが進路の変化の要因であると、ITビジネス科主任の大山直樹先生は語る。

「当時ICTに詳しくなかった私は、学科改編に戸惑いました。それでも、学校が変わるためには教師が変わるしかないと考え、学科一丸となってカリキュラム開発や教材研究を

進めました。資格取得だけが目標になりがちな生徒に、取得した資格の生かし方を考えられるような指導ができていなかったことを問題視し、真正面からその解決に尽力しました」

学科改編への挑戦は、トップレベルのスポーツ活動と大学進学との両立を目指すアスリートアドバンス(AA)コースの誕生につながった。部活動が盛んな同校の強みを生かしつつ、学力・進路を保障し、生徒の可能性を広げたいと願った現3学年主任の宇渡智之先生が企画し、管理職に提案。08年度に新設された。

「スポーツだけに秀でた生徒を育てることは、保護者も私たちも望んでいません。強豪の部活動の顧問も、思いは一緒です。難関大学の一般選抜にも対応する文理別・習熟度別授業の体制を整え、文武両道のコースを新設することができました。模擬試験も、受験に向けた調整は簡単ではありませんが、全員が受験します。新コース設立を実現できたことは、私の自信になっています」

改革が実り、現在、同コースは難関大学合格者や日本代表レベルのプロスポーツ選手を多数輩出している。進学後もスポーツに打ち込みながら、セカンドキャリアを意識し、大学院進学や資格取得を目標に勉学に励む「文武両道」の卒業生の姿は、生徒には理想に、教師には誇りとなっている。

同校の特色の1つとなっている放課後の学舎「KOKOKU寺子屋」も、プロジェクトから生まれた。大学入試対策や資格取得、英語などの語学、料理やピアノなどの実技の中から、生徒は1日1講座を受講できる。生徒の興味・関心を広げ、主体的に学ぶ姿勢を育むことがねらいであり、ここで才能を開花させ、自信を深める生徒が現れている。

また、教師一丸となって生徒指導に力を入れてきたことが、同校の躍進の1因であると、2学年主任のウエルチ春雄先生は語る。

「教師によって指導の基準が異なると、生徒は反発します。教師が時間厳守や身だしなみについて同じ基準を持ち、その大切さを粘り強く説明すると、生徒は理解を示すようになります。一方で、生徒本位を第一に、時代の変化に合わせて指導方針の見直しもしています。例えば、以前は持ち込み禁止だったICTデバイスも、リテラシー教育を重視した上で、現在は積極的に活用しています」

### エビデンスに基づいた指導で、希望進路実現への挑戦を後押し

17年度には、全生徒の希望進路の実現に向けて、進学指導部の主導による学力向上策に本格的に着手した。当時は学習習慣が身につけていない生徒が多く、指定校推薦入試（現・

学校推薦型選抜）で進学した卒業生が大学を中退してしまうケースが散見されたからだ。

まず、基礎学力不足が大学中退の要因であると考え、一部のコースのみで実施していた模擬試験を全コースに導入。学校全体でエビデンスに基づいた指導を強化した。着目したのは、GTZ（\*1）のD3の数だ。その数を減らそうと、全コースで朝学習を実施。基礎学力の定着を目指し、英単語テスト、朝学習での課題をその日のうちに提出する「毎日課題」、社会に目を向けることを意図したNIE（\*2）などを行った。

さらに、指定校推薦入試希望者に対して、年10回を超える補習とガイダンスを実施。教材を忘れたり、遅刻が続いたりした場合は、推薦の取り消しも辞さないことを示すとともに、推薦入試の合格者にもセンター試験の受験を奨励した。

難関大学の受験指導も、全コースで模擬試験を実施したことで変わった。コースにかかわらず、学力の高い生徒を把握し、その情報を学年団で共有して、面談などで生徒の背中を押した。そして、生徒の学力に応じた個別指導を徹底した結果、すべてのコースで大学進学希望者数が増えていった。進学指導部長の高橋亮先生は、そうした指導が可能になった要因を次のように語る。

「担任は、生徒との面談で授業態度や家庭



理事長・校長  
草島葉子 くさじま・ようこ  
同校に赴任して25年目。



進学指導部長  
高橋 亮 たかはし・りょう  
教職歴13年。同校に赴任して11年目。国語科。



1・2ビジネス科主任、1学年主任  
大山直樹 おおやま・なおき  
教職歴24年。同校に赴任して24年目。商業科。



2学年主任  
ウエルチ春雄 うえち・はるほ  
教職歴16年。同校に赴任して16年目。英語科。



3学年主任  
宇渡智之 うわたり・ともゆき  
教職歴19年。同校に赴任して19年目。国語科。



英語科主任  
松田真平 まつだ・しんぺい  
教職歴21年。同校に赴任して7年目。英語科。

学習の方法、模擬試験の結果などを確認し、生徒一人ひとりの学習状況を丁寧に見取るようにしました。そうして把握した各クラスの状態は、週1回の学年会で共有されるとともに、重要事項は学年主任会議に上げ、他学

※プロフィールは、2021年3月時点のものです。

\*1 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。

\*2 新聞を活用した教育活動。

図2 「自己目標」設定シート(1年生の記入例)

1年生3学期 始業式・終業式

1年( )組( )番 名義

2学期・冬期休暇を振り返り、学年最後の学期に向けて自己目標を再確認しよう!  
(3学期・始業式)

冬期休暇を振り返って、「積極的に取り組めたこと・担任に連絡したいこと」を書こう!

英検の対策として、英単語の勉強やリスニングの対策をした。

自己目標と方法

3学期中に達成すること	どのように取り組むのかを書こう!
学習面	学習量
期末テストで平均点を目標にする	理解力以外の弱い所を再学習しよう
生活習慣	遅い・理解や生活習慣
1年間で朝の時間を知りたい	変更なしで、筋トレを定期的に行う。
靴を履く!	

1年間の振り返りと進級後の目標を考えよう!  
(3学期・終業式)

欠席日数	遅刻回数	早退回数	評定平均値
1回	0回	0回	(前) 4.5
学級活動	課外クラブ	取組検定	
図書係	軽音楽部	漢検:準2級 英検:準2級 簿記:簿記検定	

自己評価と目標

1年間を振り返って、勉学・友人関係・課外活動などで、自分の満足度はどうでしたか。

評価

a. 大満足である  b. 満足している  c. あまり満足していない

この学年の反省をふまえて、次の学年に向けての達成目標を立てよう。

目標

1. スペースを減らし時間を減らし、その時間を勉強に充てる。

担任からのアドバイス

学習に対して、真面目に取り組む姿を見てくれた事、素晴らしいです。苦手科目に対して、しっかりと取り組むことで、改善を期待しています。また、生活習慣も整えたいですね。しっかりと頑張ってください。

2001年度の改革当初から、全学年・全コースで導入している『自己目標』設定シート。現在は、学期の初めに、目標とその達成に向けた取り組みを書き、学期末に、目標の達成状況の確認と改善の方向性の検討、目標の振り返りを行い、長期休業中の目標について記入する書式にしている。20年度の1年生3学期のシートでは、2学期と冬季休業中の行動を振り返り、3学期の目標とその達成に向けた方法を記入させ、3学期末には、1年間の振り返りとして出席状況や成績などを振り返った上で自己評価を行い、2年生に向けた目標を立てさせた。そして、それを担任が確認し、進級に向けたアドバイスを送った。

※学校資料をそのまま掲載。

年からアドバイスを受けられるようにしました。エビデンスに基づいた生徒個々の学習状況を、管理職を含めて学校全体で共有していることが、本校の強みです」

英語の指導も17年度から強化している。定期的な英単語テストによって学習習慣の定着を図るとともに、全コースでGTECや英検などの外部検定試験を導入し、英語4技能の育成も図っている。また、英語が苦手な生徒でも学習しやすいようにしようと、4線で構成された教科書本文用と単語学習用の2種類の学校独自の英語ノートを作成。全生徒に配

布し、徹底的な基礎固めを行った。ノートの使い方が上手な生徒は、終業式で全校生徒の前で表彰するアワードタイムをつくり、英語の学習意欲を高めるよう努めた。英語科主任の松田真平先生は次のように語る。

「英単語テストや外部検定試験、英語ノートは、生徒が学習成果を実感し、学習意欲を高めることにつながっています。成果が出たことで自信を持ち、他教科・科目の学習にも前向きに取り組むようになった生徒も多く見られます。今後は、海外進学も視野に入れた指導をしていきたいと思っています」

## 変革の成果・展望

自立・自律を促す指導を強化し、自ら成長できる生徒を育む

一連の改革により、京都大学を始めとした国立大学合格者数が急増。卒業生の大学中退率も激減した。ITビジネス科の卒業生が進学先の大学で学部長賞を受賞するなど、大学での活動を誇らしげに報告するために母校を訪れる卒業生も増えた。

「学力的に厳しいと思っていた先輩が難関大学に合格し、進学後も輝いている姿に、在校生も教師も自信を深めています。難関大学合格は遠い夢だと尻込みしていたのは、我々教師だったのだと痛感しました」(高橋先生)

今後の課題は、『自己目標』設定シート(図2)やルーブリックなどを活用しながら、生徒の自立・自律を促す指導を強化していくことだ。

「本校は面倒見がよいという評価を学外からいただいています。第1志望にこだわらず、自ら情報を集め、自身の夢を語る生徒が現れるなど、自立した姿も見られるようになってきます。すべての生徒が夢や目標を見つけて自ら成長していけるような環境を整備していきたいと考えています」(草島理事長)